地域スポーツコースの10年

松山　尚道[1)*]　菅井　京子[1)*]　新宅　幸憲[1)*]　佐藤　馨[1)*]　金田　安正[1)*]
金森　雅夫[1)*]　新井　博[1)*]

Educational and Research Activities of Ten Years in Community Sport Course

Naomichi MATSUYAMA, Kyoko SUGAI, Yukinori SHINTAKU, Kei SATO,
Yasumasa KANEDA, Masao KANAMORI, and Hiroshi ARAI

Abstract

The Educational policy of the Community Sport Course is a specialty course bringing up the talented person who can contribute to health promotion, leisure sport activity for all including an elderly person, a person with a disability and with the lifestyle-related diseases. This article is on educational and research activities of ten years in Community Sport Course.

Key words：レジャー・スポーツ　Leisure Sport,　地域スポーツ Community Sport Course

1）生涯スポーツ学科
＊注：発表者の順序は五十音倒置で，本論文に対して全発表者は対等の責任を負う。

Ⅰ．地域スポーツコースのポリシーと講義

1．地域スポーツコースのポリシーの原案

地域スポーツコースのアドミッションポリシーは以下のように構想された．

「地域スポーツコースでは，人々の生活基盤である『地域』における多様なスポーツに関

表1．「びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部生涯スポーツ学科のポリシーについて」

◆生涯スポーツ学科

近年の生涯スポーツに対する多様なニーズに応えうる高度職業人の育成を目指します．

そのため，生涯スポーツ学科では，「野外スポーツコース」，「地域スポーツコース」，「学校スポーツコース」の3つのコースを設置し，特色あるカリキュラム構成をしています．具体的には，実践的で高度な各コースの専門実習をはじめ，主体的に学び，追究する場としての演習・特別講義などを通して学びを深め，実社会に貢献できる多様な知識と技能を身につけます．

このようなカリキュラムを通して各コースが養成する人材は，

（1）自然の中での生きた学びを通して培った感性や，人・環境への理解に基づいて，あらゆる年代・立場の人々に，自然の持つ特性を活かしたスポーツ教育活動を企画・運営し，指導できる資質および能力を備えた人材（野外スポーツコース）

（2）地域のスポーツにかかわり，その運営・管理ができる立場の人材をはじめ，子どもから高齢者，障害者や生活習慣病の方など，あらゆる方を対象にした健康増進・余暇活動の充実に貢献できる人材（地域スポーツコース）

（3）スポーツ・健康教育に深い理解と高い実践力を備え，学校教育現場における保健体育授業やスポーツ活動の充実に寄与する人材（学校スポーツコース）

を中心に，生涯スポーツにおける学びが多方面へ応用できる人材の育成を目指します．

したがって，「一生涯を通してスポーツと関わりたい」と考えている人，「スポーツを通して人と関わりながら社会に貢献したい」と考える人の入学を望みます．

●学校スポーツコース

学校スポーツコースでは，スポーツ・健康に関わる学習や教育の中心的な営みである「学校体育」・「健康教育」・「保健体育授業」に関わる研究を行い，その計画的な構造や内容を理論的・実践的・実証的に探究します．教育現場において求められている授業構想力や教材開発力，授業実践力，授業分析と授業改善の力などの実践的力量を高めることをコース授業で学修し，スポーツ・健康教育の現場において即戦力として活躍できる資質・能力を備えた人材を育成します．学校保健体育教師ばかりでなく，スポーツ・健康教育に関わる多くの専門領域の基礎的な知識や技能の習得に関心のある人を求めています．

●野外スポーツコース

野外スポーツコースでは，「自然，人，体験」に関わる研究成果に基づいた教育活動の中で，人々が豊かに生きるための「社会性」，「自主性」などあらゆる「生きる力」を育むために，実践的・実証的・理論的に野外スポーツを探求します．自然の中でのスポーツを通して自らの感性を磨き，環境に配慮した安全で楽しい野外スポーツプログラムを提供する専門的知識（企画・運営・評価）と技術を有したリーダー的立場になる人材，子どもから大人まで幅広い対象者に，生涯を通じて自然の中でのスポーツを提供できる資質・能力を備えた人材を育成します．これらの専門知識や技術の獲得について興味関心を持ち，熱意と情熱を持ってコースでの学習に主体的に関わることのできる「自然が好き，人が好き，スポーツが好き」な人を求めています．

●地域スポーツコース

地域スポーツコースでは，人々の生活基盤である「地域」における多様なスポーツに関わる研究を行い，日常生活における余暇活動を充実させ，生活の質の向上に寄与できるようなスポーツのあり方を，実践的・実証的・理論的に探究します．多様化し，多志向化する地域スポーツの現場において，子どもから高齢者まであらゆる人が主体的にスポーツを楽しめるよう，多様なスポーツ活動の企画・運営・指導能力を高めることにコースとして取り組みます．実習を通して実践力を向上させ，よりよいスポーツ環境を「地域」に作ることのできる人材を育成していきます．スポーツを核とした地域づくりに関心のある人，「地域」の人々の健康や福祉（よりよい生き方をめざす）に貢献するスポーツのあり方に関心のある人を求めています．（2009年4月）

わる研究を行い，日常生活の中における余暇活動を充実させ，生活の質の向上に寄与できるような地域スポーツのあり方を，実践的・実証的・理論的に探究します．多様化し，多志向化する地域スポーツの現場において，子どもから高齢者まであらゆる対象の人がスポーツを楽しめるよう，様々なスポーツプログラムの企画・運営能力・指導技術を高めることにコースとして取り組みます．さらに，これらのすべての人々を対象としたスポーツ環境を『地域』につくることのできる人材を実習等の実践をとおして育成していきます．『地域』の人々の健康や福祉（よりよい生き方をめざす）に貢献するスポーツのあり方に関心のある人，スポーツを核とした地域づくりに関心のある人を求めています．」（2009年２月原案）

その後，生涯スポーツ学科会議で，議論を経たのち，文書の書き方を統一した書き方で，次のように統一された．

２．生涯スポーツ学科の中での地域スポーツコースのポリシーの樹立

地域スポーツコースのポリシーは，「びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部生涯スポーツ学科のポリシーについて」（表１）のなかで，カリキュラムポリシーとして，地域スポーツコースは，「地域のスポーツにかかわり，その運営・管理ができる立場の人材をはじめ，子どもから高齢者，障害者や生活習慣病の方など，あらゆる方を対象にした健康増進・余暇活動の充実に貢献できる人材」を育成する専門コースであるとされた．アドミッションポリシーとして，「実習を通して実践力を向上させ，よりよいスポーツ環境を「地域」に作ることのできる人材を育成していきます．スポーツを核とした地域づくりに関心のある人，「地域」の人々の健康や福祉（よりよい生き方をめざす）に貢献するスポーツのあり方に関心のある人を求めています．」以上と決められた（2009年４月）

３．地域スポーツコースの講義内容

表２に地域スポーツコースの2006年と2012年現在の講義内容をまとめた．

2012年度の担当領域は，スポーツ社会学，スポーツ哲学，スポーツ文化論，体育・スポーツ史，身体発育発達学，スポーツ健康学，障害者スポーツ，運動学であった．なお，スポーツ心理学は，2003年度から2007年度まで，地域スポーツコースでの担当であった．

Ⅱ．地域スポーツコース教員の活動内容

地域スポーツコース教員の活動内容を寄稿のまま，五十音逆順に記述した．

１）　地域のこどもに対する運動指導の実践（松山　尚道）

松山は2010年４月より長瀬の後任として赴任した．専門の研究領域はスポーツ運動学および体操競技・器械運動である．これからの地域におけるスポーツ指導者育成を目指し，ゼミ活動や専門実習などにおいて，金子によって提唱された発生論的運動学（金子2002,2005,2007,2009）にもとづいた運動の学習指導を中心に授業展開を行った．具体的には運動学習や指導法に関する文献の講読の後に，それをもとにしてグループ毎での運動実技体験をして，更に事後のフィードバックを通してより実践的な運動の指導法に対する学びを深めた．特にゼミ生については，2011年２月より月に２回程度BSC体操教室において指導体験を行っている．2011年度の活動においては，びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ開発・支援センター年報第８巻（2011）に報告書が掲載されている．また，例年数名の学生がその指導経験をもとにして卒業研究を行っており（2011），地域スポーツ指導者としての経験を学習と実践の両方から取り組むことができた．

表2．地域スポーツコースの講義内容

2006年 学部共通科目・生涯スポーツ学科目	2012年 学部共通・生涯スポーツ学科目
【スポーツ社会学関連】 ・スポーツ社会学　海老島　均 ・レジャー・レクリエーション論　海老島　均 ・スポーツとジェンダー　佐藤　馨	【スポーツ社会学関連】 ・スポーツ社会学概論　佐藤　馨 ・レジャー・レクリエーション論　佐藤　馨 ・スポーツとジェンダー　佐藤　馨 【スポーツ哲学・スポーツ文化論・体育・スポーツ史関連】 ・スポーツ哲学概論　新井　博 ・スポーツ文化論　新井　博 ・体育・スポーツ史　菅井京子 ・体育・スポーツ史　新井　博
【発育発達学・スポーツ健康学・障害者スポーツ関連】 ・身体発育発達論　新宅幸憲 ・衛生・公衆衛生学　金森雅夫 ・体力測定と評価　中原今日子 ・生涯スポーツと安全管理　金森雅夫 ・障害者スポーツ論　金田安正 【スポーツ心理学関連】 ・スポーツ心理学　豊田則成 【その他】 ・地域スポーツの理論と実際　金田・海老島・佐藤 ・健康体操　菅井京子	【発育発達学・スポーツ健康学・障害者スポーツ関連】 ・身体発育発達論　新宅幸憲 ・衛生・公衆衛生学　金森雅夫 ・体力測定と評価　金森・藤松 ・生涯スポーツと安全管理　金森雅夫 ・障害者スポーツ概論　金田安正 【運動学関連】 ・運動学概論　松山　尚道 【その他】 ・地域スポーツの理論と実際　新宅・佐藤・松山 ・スポーツ倫理 ・スポーツボランティア実習 ・健康体操・体つくり運動　菅井京子
2006年 地域スポーツコース科目	2012年 地域スポーツコース科目
・ニュースポーツ論　野々宮　徹 ・コミュニティースポーツ論　長瀬　整司 ・コミュニティスポーツとジェンダー　佐藤　馨 ・スポーツクラブと地域社会　海老島　均 ・生涯スポーツと地域保健　金森雅夫 ・障害スポーツ地域指導論　金田　安正 ・地域スポーツ特別講義　長瀬・金田・金森 ・スポーツカウンセリング　豊田則成	・ニュースポーツ論　新井　博 ・女性と生涯スポーツ　佐藤　馨 ・地域社会とスポーツ　佐藤　馨 ・生涯スポーツと地域保健　金森雅夫 ・障害者スポーツ地域指導論　金田安正 ・地域スポーツ特別講義　金森・金田・菅井 ・こどものあそびと運動　新宅幸憲

文献

・金子明友（2002）わざの伝承．明和出版：東京．
・金子明友（2005）身体知の形成上．明和出版：東京．
・金子明友（2005）身体知の形成下．明和出版：東京．
・金子明友（2007）身体知の構造．明和出版：東京．
・金子明友（2009）スポーツ運動学．明和出版：東京．
・松山尚道（2011）BSC体操教室報告書．びわこ成蹊スポーツ大学　スポーツ開発・支援センター年報，第8巻：41-42．

2）スポーツ専攻学生の体操教育と新しい体操の原点を求める体操史の研究を通して（菅井　京子）

グーツムーツ（J.C.GutsMuths, 1759-1839）やヤーン（F.L.Jahn, 1778-1852）が近代体育の先駆的役割を果たした後，学校への体育の導入は，19世紀中頃，シュピース（A.Spieß, 1810-1858）によって始められ，マウル（A. Maul, 1829-1907）によってほぼ達成されました．このシュピース=マウル方式の体操は，主に身体形成（からだづくり）を目指すもので，人間の身体運動を部分運動に分割し，それらをひとつひとつ学習させ，いろいろに組み合わせ，全体的な連続運動に仕立てていく徒手体操を主要内容とするものでした．そして，それは号令に合わせて一斉に行われる幾何学的・形式的な集団運動として行われました．これは，自然科学を万能とみなす時代の合理的精神とも相俟って，ヨーロッパ，アメリカ，日本へと伝わり一世を風靡しました．しかし，その後，このシュピース=マウルの体操は，あまりに形式的，人為的で，不自然であり，関節人形運動であるとか，操り人形運動であるという批判を受けるようになり，新しい体操が求められ，20世紀の初め頃に体操改革運動が起こりました．

この体操の改革運動以来，さかんに新しい体操の研究が進められ，体操は大きな発展を遂げてきました．特にリズム体操に代表されるような分野の発展には目覚ましいものがありました．それは全身的でリズミカルな運動を問題にして，身体形成（からだづくり）だけでなく，運動形成（動きのトレーニング）を重視するような体操の分野です．リズム体操は，先の体操改革運動の頃にドイツのボーデ（R.Bode, 1881-1970）によって始められました．それまでの体操が，解剖，生理学的な立場から身体を部分部分に分けて構成されていたのに対して，彼は人間を，全体がひとつの統一のとれた生命体として理解しようとしました．そして生命体としての身体運動の特質は，律動であるという立場から，有機的で，リズミカルで，自然な運動の体操体系をつくりあげました．そして，今日，体操は，このリズム体操を中核にして，身体形成と運動形成を達成するものとして行われています．さらに，この新しい体操は，動きの基礎修練からその成果の発表会や体操祭に至る方法論をうち立て，競技型のスポーツとは棲み分けをし，競争ではなく共演する型のスポーツの領域を確立してきました．

現代社会においては，その競争原理を反映して競技型のスポーツが繁栄をみています．しかし，また，その行き過ぎも指摘されています．いわゆる勝利至上主義の問題です．生涯スポーツの立場から今後のスポーツを考えてみると，体操のような共演型のスポーツが重要な役割を果たすことが期待されます．スポーツ専攻学生の体操教育と新しい体操の原点を求める体操史の研究を通して，この新しい体操の更なる発展と普及に貢献できればと考えています．

研究活動

- 2004年　1920年代の学校における身体教育の改革構想，学校体育強化のための改革努力，および体育教師養成の問題について　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　第2号．
- 2005年　体操改革運動の後継および発展としてのメダウの体操体系について　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　第3号．
- 2006年　表現体操の方法論について　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　第4号．
- 2007年　メダウとその教授法について　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　第5号．
- 2009年　L．パラートの『身体と芸術』とF．ヒルカーの『身体教育の新しい課題』について　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　第7号．
- 2010年　体操改革運動におけるF．ヒルカーの役割について　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　第8号．
- 2011年　F．ヒルカーの「ドイツ体操の特

質について」 びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　第9号.

・2011年　ドイツ体操同盟の成立に果たしたF．ヒルカーの役割について　スポーツ史研究　第24号.

・2012年 『ドイツ体操（Deutsche Gymnastik)』に果たしたルードルフ・フォン・ラバンの貢献について　スポーツ史研究　第25号.

・2013年 『ドイツ体操（Deutsche Gymnastik)』に果たしたルードルフ・ボーデの貢献について　スポーツ史研究　第26号.（投稿中）

3） 10年を振り返っての教育と研究（新宅　幸憲）

本学が，2003年4月3日に開学して以来10年が経過した．第1期生237名の顔が懐かしい．私の場合は，開学当初の2年間は大阪成蹊女子短期大学体育学科を兼務，同時に本学のスポーツ開発・支援センターも兼務した．

本学における授業担当は，身体発育発達論である．スポーツという外的刺激が子どもから高齢者にいたるまで，どのような影響を与えているのか．加齢現象において，スポーツをとおした身体運動の効果やその重要性について講義を行っている．2011年4月から大学院スポーツ学研究科において，発育発達特論を担当して研究のおもしろさを教えている．

研究活動としては，「立位姿勢と運動発達および足底面」の観点から「日本体育学会」，「日本体力医学会」，「A merican College of Sports Medicne：ACSMアメリカスポーツ医学会」において発表を行っている．

ゼミ活動は2005年からであった．ゼミ生の就職状況をみると，大学院への進学，地方公務員，中学校の講師，支援学校の講師，地域のスポーツ指導者，総合型地域スポーツクラブの指導者，一般企業等である．現在のゼミ活動の地域貢献としては，2008年からは，大津市介護予防運動実践事業の一端として，「高齢者の体力測定」や「立位姿勢の重心動揺測定」を実施している．2009年からは，比良駅前にある「特別養護老人ホームひらり」の運動実践．2010年からは，北比良地域の方々と話し合いを持ちながら，学生が主体となり「北比良スポーツイベント（北比良地域の運動会)」を実施している．

〇研究活動報告

石井喜八　新宅幸憲他　2009年度（第7版）スポーツ動作学入門（市村出版）

新宅担当　第1章　運動のための構えの姿勢　第2章　打つ運動　第3章　水と運動

総ページ数　41ページ

中井孝章　新宅幸憲他　2006年度（第1版）大都市圏の子どもたち（日本教育研究センター）新宅担当　第2章　子どもの身体能力の現状とその改善策　総ページ数21ページ新宅幸憲他　びわこ成蹊スポーツ大学編2008年度スポーツ学のすすめ（大修館書店）第4章　地域社会とスポーツ　⑨発育発達とスポーツ　総ページ数4ページ

新宅幸憲他　2011年度　健康・スポーツ科学テキスト　機能解剖・バイオメカニクス（文光堂）　第Ⅲ　全身の動き　1．立つ　総ページ数8ページ　新宅幸憲　溝畑　潤　臼井永男　赤塚　勲　2004年度　4歳児の運動能力，重心動揺および足底面の安定性の低下―5年間の推移から―　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　創刊号　99-103.

YUKINORI SHINTAKU, TETSUO OHKUWA, KYONOSUKE YABE. Effects of physical fitness level on postural sway in young children. ANTHROPOLOGICAL SCIENCE Vol.113 237-244 2005

YUKINORI SHINTAKU, HIROSHI FUJINAGA, KYONOSUKE YABE. Performance of dynamic motor tasks in 5-year-old children levels of static standing balance. International Journal of Fitness Vol.3 Issue 1,61-67 2007

新宅幸憲　幼児の立位姿勢における静的平衡

性の研究（博士論文）大阪体育大学大学院後期博士課程博士委員会　1-65．2008．2．21
Tadashi Wada,Kenji Ohishi, Noriyuki Yamamoto, Takahito Tago, Yukinori Shintaku, Tadao Isaka, Takaaki Matsumoto. CHANGES IN THE POSTURAL SWAY IN ELITE SYNCHRONIZED SWIMERS.
International Sports Biomechanics（ISB）2011 Brussels
和田匡史　大石健二　佐藤孝之　山本憲志　新宅幸憲　松本高明　重心動揺解析によるリートシンクロナイズドスイマーのバランス能力 国士舘大学理工学部紀要第4巻101-105 2011新宅幸憲　溝畑　潤　臼井永男　乾　道生　赤塚　勲　2003　3歳児における運動能力・足底面・重心動揺の年次変化について―5年間の推移から―大阪成蹊女子短期大学研究紀要第40号139-146．新宅幸憲　廣瀬恵一　溝畑　潤　臼井永男　赤塚　勲　矢部京之助　2005　高等聾学校生における重心動揺について　神学と人文（大阪キリスト教短期大学紀要第45集201-207　新宅幸憲 2011年 スポーツをとおした地域貢献 ―高齢者と幼児の立位姿勢に着目して― びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要　第8号 11-17新宅幸憲　溝畑　潤　臼井永男　赤塚　勲　2003年　4歳児の運動発達と重心動揺および足底面の関連性　―5年間の推移から―　子どもと発育発達（杏林書院）日本発育発達学会編　1巻5号 353-356．新宅幸憲　2004年　スポーツと健康　びわこ成蹊スポーツ大学　スポーツ開発・支援センター年報　第1巻第1号　118-121新宅幸憲　2005年　乳幼児期における体育　体育の科学　第55巻　9　666-670　新宅幸憲　2005年　高齢者における立位姿勢動揺に関する一考察―介護予防運動実践教室より―びわこ成蹊スポーツ大学　スポーツ開発・支援センター年報　第2巻第1号　22-26新宅幸憲　2006年　小学校高学年における立位姿勢の静的平衡性について　―Sスポーツ少年団ミニバスケットボールクラブ参加者を対象として―　びわこ成蹊スポーツ大学　スポーツ開発・支援センター　年報　第3巻第1号　60-66新宅幸憲　2007年　立位姿勢の発達的変容　―姿勢教育に着目して―　こどもと発育発達　第5巻3号　164-167新宅幸憲　2007年　幼児の立位姿勢の静的平衡性について―同一人物3年間の推移に着目して―　びわこ成蹊スポーツ大学　スポーツ開発･支援センター　年報　第4巻第1号　9-14新宅幸憲　2008年　立位姿勢における重心動揺の運動前後の変化―高齢者の運動実践教室参加者に焦点をあて―　びわこ成蹊スポーツ大学開発・支援センター　年報　第5巻第1号　15-21新宅幸憲　2011年　高齢者の体力因子と立位姿勢の安定性について　体力科学60巻6号　713　2007．10　滋賀県高島町立なのはな園園児の運動能力および立位姿勢での重心動揺測定
新宅幸憲 2010年 BOSS（課外活動代表者会議）について びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツ開発・支援センター年報 第7巻 P57 新宅幸憲2010年 親子の姿勢教室　びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツ開発・支援センター年報 第7巻 P116,P117
新宅幸憲2011年 北比良スポーツイベント2011　びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ・開発支援センター年報第8巻P31新宅幸憲2011年 特別養護老人ホーム「ひらり」「絆」での運動実践　びわこ成蹊スポーツ大学　スポーツ開発・支援センター年報第8巻P32新宅幸憲2011年 南すこやか体操教室（高齢者）の体力測定および重心動揺測定　びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ開発・支援センター年報第8巻P33新宅幸憲2011年 クラブ代表者会議について びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ開発・支援センター年報第8巻P34新宅幸憲2011年　滋賀県甲良東保育センター保育従事者研究会講演「子どもの身体能力，運動能力を育むための学び」びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ開発・開発支援センター年報第8巻P35　藤松典子　若吉浩二　金森雅夫　新宅

幸憲　森川みえこ　的地修　松田　保　2011年びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第9号P141-144　アカデミックアワー研究報告

4）　調査研究からみた女性とスポーツこれからの10年（佐藤　馨）

2012年，イギリスのロンドンで第30回オリンピックが開催された．このロンドンオリンピックは，女性とスポーツの新たな一歩を踏み出す契機にもなった大会と言える．例えば，宗教的問題からこれまで女子選手の出場を制限した国々が今大会，初めて女子選手の派遣に踏み切り，ロンドンオリンピックは史上初，すべての国・地域から女子選手が参加する大会となったのは記憶に新しいところである．また，わが国ではこの大会で初めて出場選手の男女比において女子が男子を上回る（男子137名，女子156名（JOC公式ホームページより））など，次回リオデジャネイロ大会においても女子の活躍が大いに期待できるのではないだろうか．

ところで，オリンピック選手を陰ながら支える指導者あるいはコーチの男女比を見ると，残念ながら女子選手の足元にも及ばないのが実情である（佐藤，2009）．さらに選手の競技環境，オリンピックへの選手派遣等，競技全般の意思決定を行なうスポーツ団体の役員においても女性の進出は皆無に等しい．2012年の順天堂大学女性アスリート戦略的サポート事業の報告によれば，スポーツ団体における女性の登用率は5％であった（図1）．こうした組織における女性役員の登用率の低さは，実は組織側の本音と建前がそれを阻んでいるといえる．例えば，役員選出の際に重視することは「組織や委員会での活躍や実績」をあげる組織が多い一方で，役員の男女比について聞くと「女性ともっと増やすべき」と回答する団体が圧倒的に多くみられた（図2，3）．すなわち，女性役員を登用することは吝かでないが実績のない女性は登用できない，というのが組織の意思であった．

他方，女子選手の引退後のセカンドキャリアについて見ると（図4），女子選手の40%が指導者になりたいと考えていることがわかった（JOC女性スポーツ専門部会，2012）．しかしながら，現在のスポーツ組織の女性役員の登用率を考えると，女性の指導者やコーチを

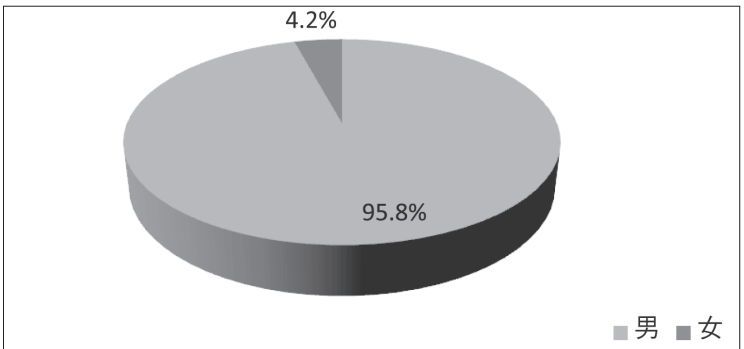

図1　スポーツ組織における団体役員の男女比（n=980）
（出典：「平成24年度　スポーツ組織調査　報告書」より）

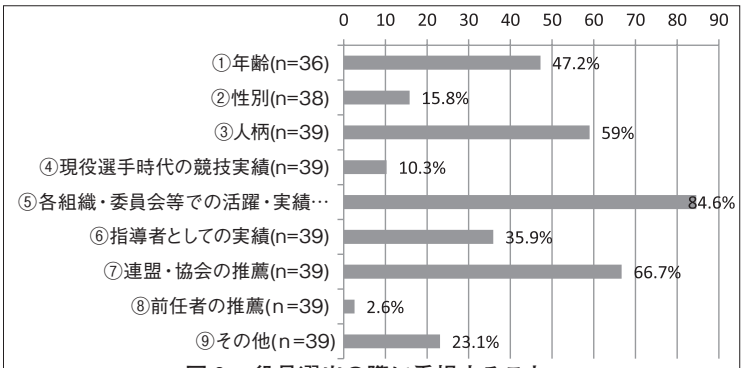

図2　役員選出の際に重視すること（複数回答）
（出典：「平成24年度　スポーツ組織調査　報告書」より）

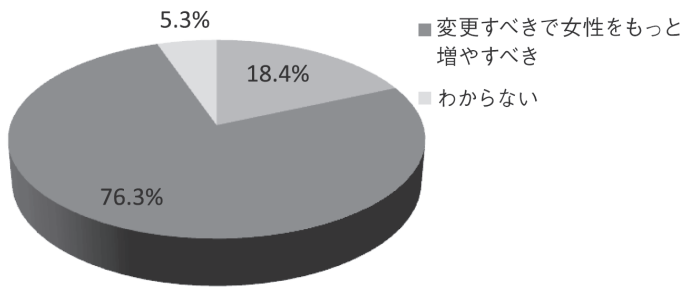

図3　理事会等の役員の男女比に対する考え方（n=38）
（出典：「平成24年度　スポーツ組織調査　報告書」より）

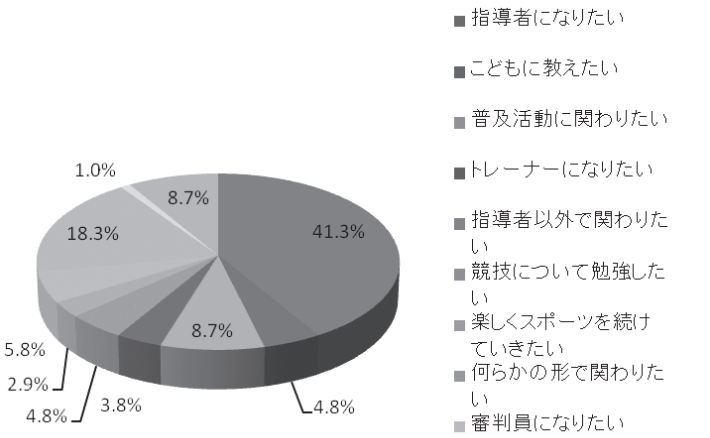

図4　引退後どのようにスポーツに関わりたいか（自由記述、n=104）
（出典：「ロンドンオリンピック出場女性アスリートに対する調査報告書」より）

増員することは困難だと言える．Mullins (2008) によれば，女性コーチの最大の障害はスポーツ界における男性優位の構造であり，女性が踏み込もうとすれば疎外感を感じることは必至，そうした構造を変えるために女性の協力者が必要であると．すなわち，女性の指導者あるいはコーチを増員するためには，意志決定の場にいる女性の存在は極めて重要であると言える．すでに役員や指導者において女性の登用を促進させる取り組みは諸外国で組織的に行われており，これは世界的潮流でもある．日本においては，昨年度から文部科学省が女性アスリート戦略的サポート事業を立ち上げ，その一環として女性リーダープロジェクトがスタートしている．取り組みとしては始まったばかりで成果はまだ見えない．しかしながら，この事業によって2014年冬季オリンピックソチ大会や2016年リオデジャネイロ大会で女子選手を支える女性指導者や女性役員が増員されたらと願う．

引用文献

・公益法人日本オリンピック委員会　http://www.joc.or.jp/games/olympic/london/japan/
・ロンドンオリンピック出場女性アスリートに対する調査報告書（2012）公益財団法人日本オリンピック委員会　女性スポーツ部会
・Mullins, A. (2008) The UK coaching system in failing women coaches: A commentary. ・International Journal of Sports Science and Coaching, 3（4）, 465-467.
・佐藤馨,小笠原悦子,佐橋由美（2009）　スポーツ団体における女性スポーツの普及・推進に向けた取組みと活動実態に関する研究―滋賀県スポーツ団体を事例として―　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 第6号　75-81
・スポーツ組織調査　報告書（2012）　順天堂大学 女性アスリート戦略的サポート事業　女性リーダーシップ開発プロジェクト

5）障害者スポーツの教育・研究
（金田　安正）

5-1）専門実習，授業などの特徴

「運動が苦手な人，体力に自信のない人，障害のある人，そしてお年寄りも，みんながスポーツを楽しむことをサポートするための理論と実践を学ぶ」ことを目的としている．

また，質の高い指導者の養成を第一義としており，そのために，実践に即した，それも指導者自らが俎上に乗った研究を行える力量が身につくようになることをめざしている．

特別講義などの授業では，「地域における障害者スポーツの実態」，「障害者・高齢者の生活とスポーツ活動」などを講義している．

さらに，最近では，リハビリテーション関係者では必須のアイテムとなっているICF（国際機能分類）について，その考え方や構造を理解させたうえで，それを活用して障害者を支援している実態について，様々な症例をとおして理解させている．

専門実習としては，障害のある人もない人もみんなが行うスポーツの展開のために「みんなのスポーツフェスティバル」を企画，開催し，さらに報告書の作成を行っている．

また，障害のある人もない人もみんなで行うスポーツの環境を整えるために，実際に車いすに乗って街中やスポーツ施設を訪れたりしてバリアーを調査している．その上で，福祉のまちづくりについて検討している．

本学の目標であった，「実践教育の重視」，「身近なスポーツの現場で活躍できる人材」の養成などに応えるため，また，地域のスポーツ振興に貢献することも目的とし，開学した年の秋から，週１回，地元の障害児者のための水泳教室を開催している．金田がスーパーヴァイザーとして立ち会い，学生たちが実際に指導にあたっている．

45分３コマで，計33名の障害児・者が参加している．

5-2）卒業生の就職

特別支援学校教員；７名，特別支援学校講師；９名，社会福祉施設（障害者スポーツセンターを含む）；９名，通常学校講師；３名，スポーツ関係施設；４名，企業等就職；10名

5-3）研究活動

障害者フライングディスク競技の普及・発展について

「視覚障害者用フライングディスクゴール」の製作

「低筋力者用ディスク投てき補助具」の製作

5-4）テレビの出演

・「みんなのスポーツフェスティバル」の紹介：2004年，KBS，15分番組
・「視覚障害者用フライングディスクゴール」の紹介：2004年，NHK富山スポーツコーナー，６分
・「比叡の光　①」：障害者スポーツの取り組み，考え方について：2006年，KBS，15分番組
・「比叡の光　②」：同上，2006年，KBS，15分番組
・「みんなのスポーツフェスティバル」の紹介：2009年，KBS，15分番組

5-5）その他

滋賀県障害者スポーツ（陸上競技）大会の補助員派遣

滋賀県障害者スポーツ（フライングディスク競技）大会補助員派遣

「みんなのスポーツフェスティバル」の開催（2004年～現在）

6）スポーツ健康学の教育・研究活動
（金森　雅夫）

金森は，生涯スポーツのうち，スポーツ健康学を教育・研究している．教育活動では，専門実習を紹介する．①銭湯ウォーキングマップを作成．京阪浜大津駅，及び膳所駅を出

発点として，ウォーキングコースを考案した．旅行者に分かりやすいように，お店などの表示を行い，運動量から初心者コース，中級者コースにわけ，ウォーキングの最後に銭湯に入ってもらって，汗を流し，身体を温めて帰るコースを考案した．マップは，観光客のために大津市内の観光協会に配布されたほか，新聞，テレビ報道された．②京都桃陽支援学校で，ウォーキングエアロDVD作成．拒食症（摂食障害），肥満症の小学低学年生用に作成された体操ビデオである．ゼミ生と支援学校を訪問し，児童と遊ぶ中で学生自身が考案した体操である．③びわこ一周サイクリング150km．9月下旬の土日2日間でびわこを一周するサイクリングプログラムで，深津助手の協力を得た．滋賀県のサイクリングクラブの協力のもとで，パンクの修理の仕方，自転車の乗り方，交通ルールを事前学習して，実際の体験をした．一部は卒業研究でも活用され，自己効力感の向上が認められた．研究活動は，以下のようである．

a）疫学に関する共同研究

・A Yamanashi, K Yamazaki, M Kanamori, K Mochizuki, S Okamoto, Y Koide: Osteoporosis international 16（10），1239-1246,2005 Assessment of risk factors for second hip fractures in Japanese elderly. Osteoporosis international 16（10），1239-1246,2005

・N Yokoi, M Kanamori, Y Horikawa, J Takeda, T Sanke, H Furuta, K Nanjo, H: Association studies of variants in the genes involved in pancreatic β-cell function in type 2 diabetes in Japanese subjects. Diabetes 55（8），2379-2386,2006

・「疫学辞典第5版」Miquel Porta編，財団法人日本公衆衛生協会，2010

・WHOグローバルレポート：高齢者の転倒予防，2010

・M Kanamori（2012）：Bicycling and Health Benefits: A Long-Distance Cycling on Biwa Lakeside, Shiga, Japan . Das7. Deutsch-Japanishe SportwissenSchaftliche，2012

b）長寿･認知症･転倒予防に関する共同研究

・M Suzuki, M Kanamori, M Watanabe, S Nagasawa, E Kojima, H Ooshiro, D Nakahara: Behavioral and endocrinological evaluation of music therapy for elderly patients with dementia. Nursing & health sciences 6（1），11-18, 2004

・金森 雅夫，鈴木 みずえ，白木 まさ子：百寿者の身体状況,性格特性と生活背景の分析．保健の科学 47（3），231-236, 2005-03

・M Suzuki, M Kanamori, S Nagasawa, I Tokiko, S Takayuki: Music therapy - induced changes in behavioral evaluations, and saliva chromogranin A and immunoglobulin A concentrations in elderly patients with senile dementia. Geriatrics & Gerontology International 7（1），61-71 16,2007

・金森 雅夫，堤 一義：動的平衡感覚機能の計測及び訓練機器の開発と高齢者のトレーニング効果の研究（高齢者,高齢者，障害者，低体力者のからだとこころと運動,オーガナイズドセッションC,本部企画）：日本体育学会大会予稿集（58），18, 2007-09-05

・堤 一義，熊中 聡，中村 範啓，安田 聡司，生田 英治，金森 雅夫：平衡感覚の測定及び強化訓練を行う機器の設計と試作．　ロボティクス・メカトロニクス講演会講演概要集, 2006

・金森 雅夫，鈴木 みずえ，奥 百合子：高齢者施設における転倒リスクアセスメントツール使用を促進する要因．保健の科学 54（3），209-214, 2012-03

c）小児保健に関する共同研究

・奥田 援史，嶋崎 博嗣，金森 雅夫：幼児の心の健康と生活状況要因との因果関係．小児保健研究 65（3），432-438, 2006-05-31

7）スポーツ史研究と活動
（新井　博）

新井のスポーツ史研究と活動を表3に示す。

表3．スポーツ史研究と活動

2007	2008	2009	2010	2011	2012
学会活動:	学会活動 体育史研究編集委員 スキー研究編集委員 開催委員長として体育学会体育史専門分科会開催.	学会活動 体育史研究編集委員 スキー研究編集委員 国際スポーツ史学会（ISHPES）ストックホルム大会で国際常任理事に選出.	学会活動: 体育学研究編集委員 体育史研究編集委員 スキー研究編集委員	学会活動 体育学研究編集委員 体育史研究編集委員 スキー研究編集委員 ５月日本体育史学会副会長に選出. ３月日本スキー学会副会長に選出.	学会活動 体育学研究編集委員 体育史研究編集委員 スキー研究編集委員 国際スポーツ史学会リオデジャネイロ大会を開催. スポーツ学会賞受賞
研究活動	研究活動 新井　博（単）「レルヒによる高田でのスキー講習開催までの経緯」『体育学研究』　2008年　第53巻 pp．277-286.	研究活動 「スキー史の誕生」『日本スキー学会誌』第20巻　第１号 pp．22-26.	研究活動 「日本におけるスキーの導入・普及と用具の供給」『体育・スポーツの近現代―歴史からの問いかけ―』阿部生雄 監修不昧堂出版	研究活動 著書『レルヒ知られざる生涯』，道和書院，出版.	研究活動 『スポーツの歴史と文化』編・著者，道和書院，出版.

Ⅲ．まとめ

地域スポーツコースのポリシーは，「地域のスポーツにかかわり，その運営・管理ができる立場の人材をはじめ，子どもから高齢者，障害者や生活習慣病の方など，あらゆる方を対象にした健康増進・余暇活動の充実に貢献できる人材」を育成する専門コースである。10年の教育・研究活動を振り返った。